

那津官家と糟屋屯倉

坂上 康俊

『日本書紀』宣化天皇元年(536)5月1日条

A) 詔して曰く。食は天下の本なり。黄金万貫ありとも、飢えを療すべからず。白玉千箱ありとも、何ぞ能く冷を救はむ。

B) 夫れ筑紫の国は、遐迹の朝届るところ、去来の関門にするところなり。是を以って海表の国、海水を候ひて来賓し、天雲を望みて奉貢す。胎中之帝より朕が身に泊るまで、穀稼を収蔵し、儲粮を蓄積し、遥かに凶年に設け、厚く良客を饗す。国を安んずるの方、更に此に過ぐるは無し。

C) 故に朕、阿蘇仍君を遣はして(未詳なり)、河内国の茨田郡の屯倉の穀を加へ運ばしむ。蘇我大臣稻目宿祢は、尾張連を遣はして尾張国の屯倉の穀を運ばしむべし。物部大連鹿鹿火は、新家連を遣はして新家屯倉の穀を運ばしむべし。阿倍臣は、伊賀臣を遣はして伊賀国の屯倉の穀を運ばしむべし。

D) 官家を那津之口に修造せよ。また其の筑紫・肥・豊三国の屯倉は、散じて懸隔に在り、運輸遥かに阻つ。もし須要ならば、以て卒かに備へむこと難からむ。また諸郡に課せて分移せしめ、那津之口に聚め建て、以て非常に備へ、永く民の命と為すべし。早く郡県に下し、朕が心を知らしめよ。

【1】宣化天皇元年(536)詔の諸問題

①漢書景帝紀からの借用

「農天下之本也、黄金珠玉、飢不可食、寒不可衣」

※字句は借用でも、骨格は「当時」のものと考えてよいのでは？

(大化改新詔の原詔と同様)

→「当時」とはいつか

i 『日本書紀』の繫年通り宣化元年(536年)……通説

532年の金官国の滅亡に対応

ii 6世紀後半に置くべきでは(酒井芳司説)

・562年任那(大加羅=高靈)の滅亡(『日本書紀』)という危機に対応

・比恵遺跡の年代観にできるだけ近づける

②近畿以東からの運穀命令の理解は？

i 難波屯倉に運ばせる記事が混入したか

(森田隆明1973説)

ii 阿蘇君は上番していたので、筑紫まで運ばせた

(田中史生2012説)。

※ i だと、なぜ茨田屯倉からの運穀者として阿蘇君が出てくるのか不明

ii だと、屯倉は播磨・備後・婀娜にも置かれているのに、わざわざ尾張から運ばせるのは疑問

③意義…運穀システム自体の成立(酒井芳司説)

後の大宰府と筑紫(筑前・筑後)・豊(豊前・豊後)・肥(肥前・肥後)
との関係の淵源
⇒大宰府の濫觴

『日本書紀』安閑天皇2年(535)5月9日条

筑紫に穂波屯倉(飯塚市)・鎌屯倉(嘉麻市鴨生)を、
豊国に膝碕屯倉(北九州市門司区、または大分県国東半島)・桑原屯倉(八女市黒木町、
または築上郡築上町、田川郡大任町)・肝等(音を取りて読め)屯倉(京都郡苅田町)・大
拔屯倉(北九州市小倉北区貫)・我鹿屯倉(我鹿。此れ、阿柯と云へ)(田川郡赤村)を、
火国に春日部屯倉(熊本市国府)を、
播磨国に越部屯倉・牛鹿屯倉を、
備後国に後城屯倉・多禰屯倉・来履屯倉・葉稚屯倉・河音屯倉を、
婀娜国に膽殖屯倉・膽年部屯倉を、
阿波国に春日部屯倉を、
紀国に経湍屯倉(経此云湍。俯世)・河辺屯倉を、
丹波国に蘇斯岐屯倉(皆、音を取れ)を、
近江国に葦浦屯倉を、
尾張国に間敷屯倉・入鹿屯倉を、
上毛野国に緑野屯倉を、
駿河国に稚贄屯倉を置く。

【2】糟屋屯倉献上記事 『日本書紀』継体天皇22年(528)12月条
「筑紫君葛子、父に坐して誅せられんことを恐れ、糟屋屯倉を献じ、死罪を贖はむことを求む」

①「屯倉」とは何か…

- ・経営の事情が分かる例としての吉備の「児島屯倉」「白猪屯倉」
- ・王権に直結する、定期的食料供給源としての「茨田屯倉」

◎旧説…田部が置かれ、(屯倉)首と、中央から派遣される田令(田領)がいる。⇒朝廷の直轄する田土経営の拠点

◎館野和己説…政治的軍事的拠点←「那津官家」、朝鮮半島内の「官家」といった田土経営とは直接関係ないミヤケがある。

◎仁藤敦史説…貢納奉仕の拠点←(『日本書紀』大化元年(645)8月5日条の東国国司詔に見える、国造・伴造(地方伴造)・県稻置(コホリの稻置)らが管掌している「官家」

※両説は和語としての「ミヤケ」を一括して説明しようとするもの。『日本書紀』では、田土経営の拠点は「屯倉」、地方支配の拠点は「官家」と書き分けたのではないか。

⇒屯倉は官家と呼べるが、すべての官家が屯倉というわけではない

◎那津官家は、田土を必須とせず

ただし、倉庫群だけでは成り立たず、管理棟と出納・警備等の管理者が必要

筑紫三宅連を設定・配置か

『日本書紀』天武天皇13年(684)12月6日条

大唐学生土師宿祢甥・白猪史宝然、及百濟役時没大唐者猪使連子首・**筑紫三宅連**得許、伝新羅至。

『古事記』神武段によれば、**筑紫三宅連**は、神武天皇の子、神八井耳命の子孫、火(肥)君・意富(多)臣・大分君・阿蘇君と同族

◎糟屋屯倉はクラ・ヤケ・ミタの3点セット 管理者は誰か？
糟屋評造「春米連広国」(698年)⇒春米連広国の出自問題

・『日本書紀』仁徳天皇13年9月条

始めて茨田屯倉を立つ。因りて春米部を定む。

※「春米」＝「穀」(粃穀つきの稲粒)を舂いて、玄米や白米の状態にすること。一升の穀から五合の玄米が採れる

・聖徳太子の娘に春米皇女

聖徳太子が膳部菩岐々美郎女との間に設けた娘。後に異母兄の山背大兄王の妃となり、難波麻呂古王、麻呂古王、弓削王、佐々女王、三嶋女王、甲可王、尾治王を生む(『聖徳太子伝補闕記』等)

『新撰姓氏録』左京神別

春米宿禰、石上の同祖、神饒速日命の後なり。

春米連の出自は？

1案) それまで筑紫君の配下にあった地方豪族を抜擢し、春米連のウジナ・カバネを与え、糟屋屯倉を管掌させた。なぜ「春米連」なのか説明が難しい。

「連」のカバネは、屯倉の管掌者としては高すぎないか？

2案) 磐井を討伐した物部氏が同族を筑紫に派遣した。

3案) 物部氏本宗家(守屋)が滅んだ時に、上宮王家が筑紫の屯倉を接收し、親しい春米連を筑紫に派遣した。

妙心寺の鐘が秦氏の太秦寺と関連があるとすれば、この可能性が大きい

※鶴見塚古墳の被葬者は誰か？

糟屋屯倉の候補地

i)古賀市美明(みあけ)1-4,2-1所在の**鹿部田淵遺跡**(県指定史跡)
6世紀半ばから後半にかけての総柱建物2棟、側柱建物2棟(うち1棟は庇付き)溝、柵。港湾機能を持つか。

ii)粕屋町の**阿恵遺跡**(国指定史跡)

・7世紀第IV四半期～8世紀半ばの倉庫群、長舎建物、(大型竪穴建物)、官衙群

→「糟屋評衙」及びその後身の糟屋郡衙の遺構であろう

・近くに鶴見塚古墳、6世紀半ばの70～100mの前方後円墳

『筑前国続風土記拾遺』では、東光寺剣塚と同規模・同規格のように記すが、実際には鶴見塚の方が大きいか。

※いずれにせよ設置当初の遺構は未発見

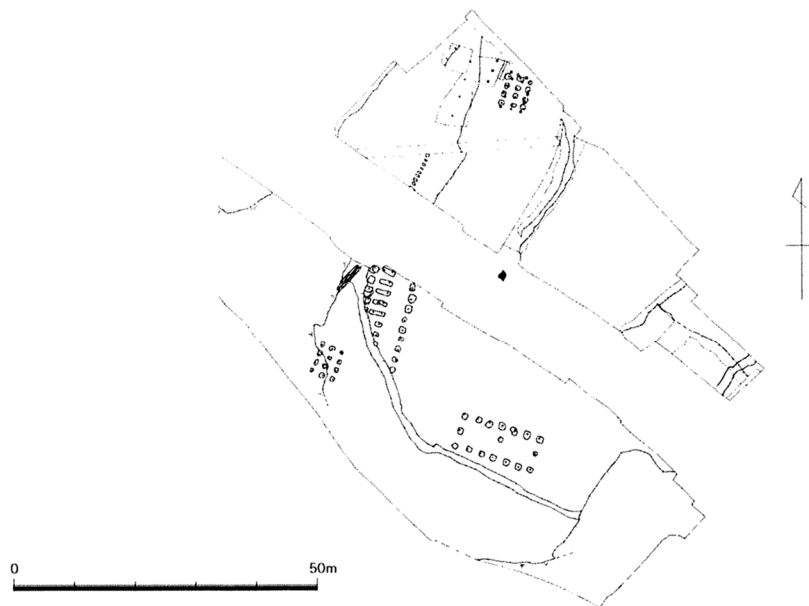


図4 鹿部田淵遺跡平面図 (1/1,000)

阿恵官衙遺跡 関連遺跡分布図

(『阿恵遺跡2次』2014)

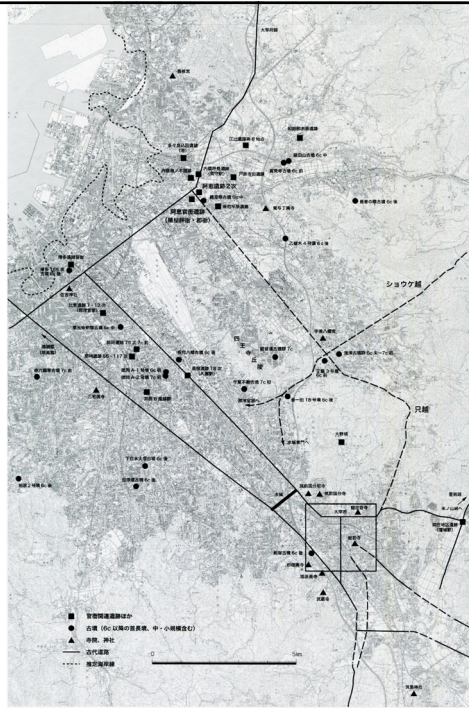


図 1-2 阿恵官衙遺跡分布図 (1/100,000)

阿恵官衙遺跡 周辺図 (保存活用計画 追補版2026)

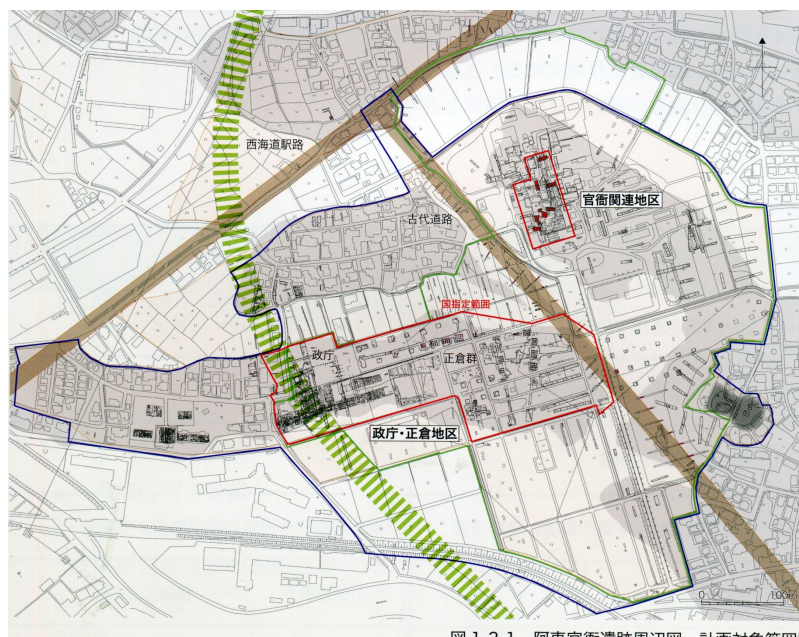
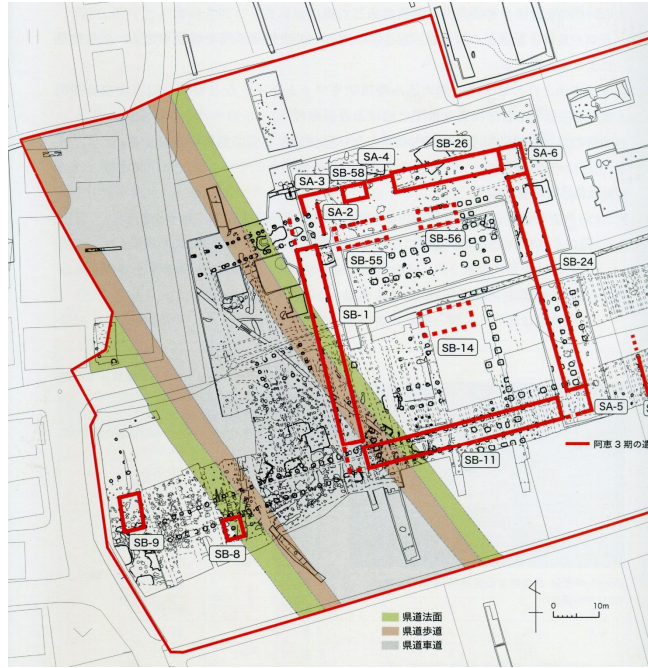


図 1-3-1 阿恵官衙遺跡周辺図 計画対象範囲図

阿恵官衙遺跡 政庁遺構 配置図3期

(整備基本計画2025)



阿恵官衙遺跡 正倉域平面図

(整備基本計画2025)

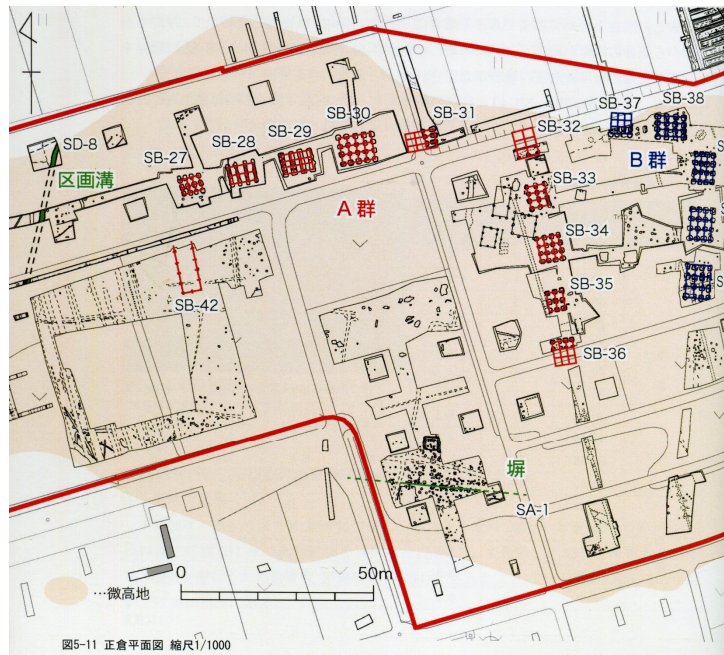


図5-11 正倉平面図 縮尺1/1000

那津官家の候補地

i 旧説 **ミヤケの地名** (南大橋1丁目)

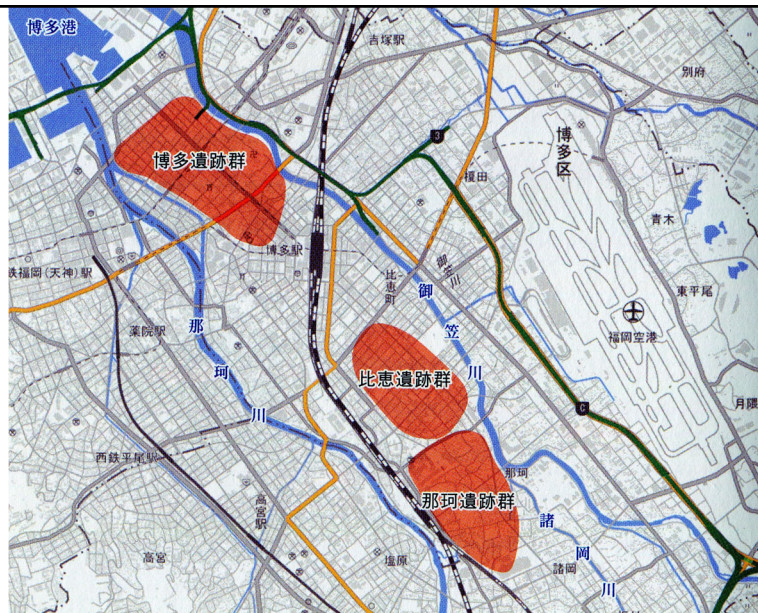
→寺院跡(三宅廃寺)を検出、官衙・倉庫群は見つからず

ii **比恵遺跡** 規則的に建てられた大型竪穴倉庫群と布掘り3本柱列の塀、ただし、6世紀半ば以降で、宣化天皇時代より後

iii **那珂遺跡** 有田遺跡(後に早良郡衙に発展)や比恵遺跡と同規格の倉庫群

時期はやはり6世紀後半から

特に114次調査では、6世紀末頃に掘削された方形区画溝を検出、一辺90mか。7世紀後半まで存続。

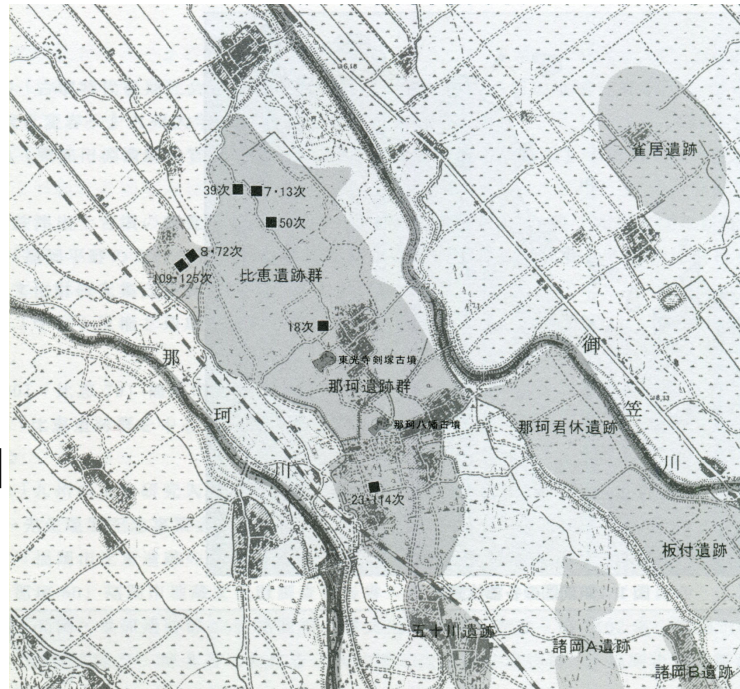


菅波正人
『鴻臚館』
2025

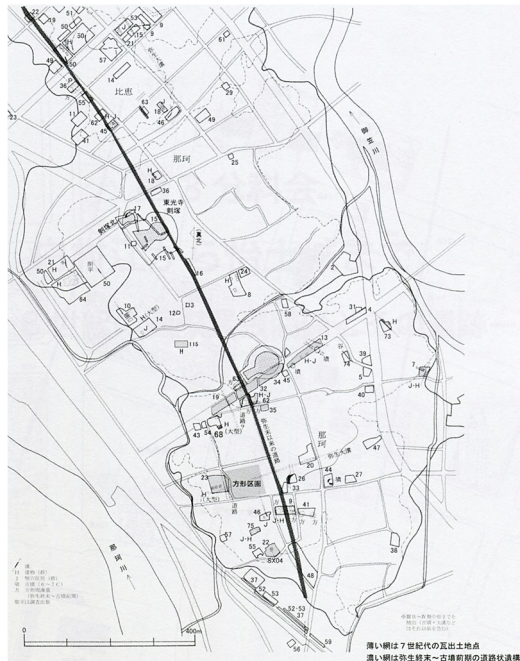
111 • 那津官家関連遺跡の比恵・那珂遺跡群の位置

那津官家の比定地については、古代の那珂郡に位置し、「三宅田」や「官田」「中津」という地名が残る、福岡市博多区の比恵遺跡群が有力である。

比恵・那珂
遺跡群位置図

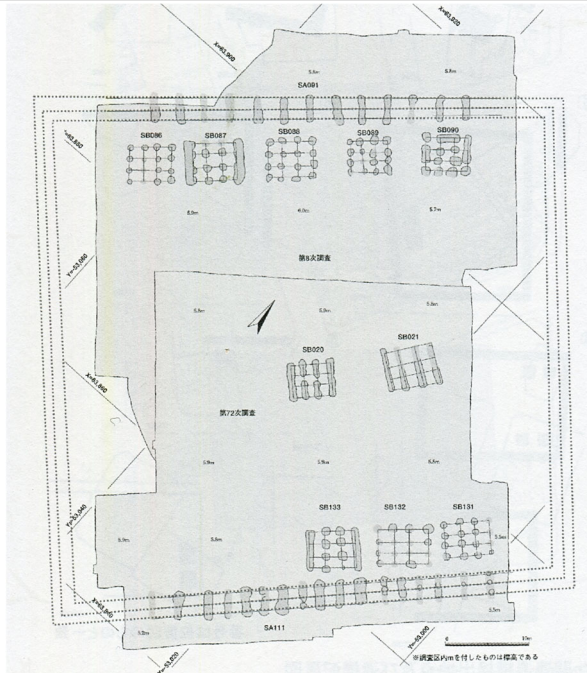


那珂・比恵遺跡群
6～7世紀の
遺構分布図



(菅波正人「博多湾岸のミヤケ関連遺跡」日本考古学協会2013年度福岡大会研究発表資料集)

比恵遺跡群
第8・72次調査
遺構配置図



(菅波正人「博多湾岸のミヤケ関連遺跡」日本考古学協会2013年度福岡大会研究発表資料集)

※那津官家はどこ？(文献史学の方法で)
施設の系譜の想定案

那津官家
崇峻朝の筑紫将軍所

『日本書紀』崇峻天皇4年(591)11月4日条
差紀男麻呂宿禰・巨勢猿臣・大伴嚙連・葛城烏奈良臣、為大將軍、
率氏々臣連、為裨將・部隊、領二万余軍、**出居筑紫。**

『日本書紀』崇峻天皇5年(592)11月5日条
遣駅使於**筑紫將軍所**曰「依於内乱、莫怠外事」。

『日本書紀』推古天皇3年(595)7月。
將軍等至**自筑紫。**

推古10年(602)の来目皇子下向時の最初の上陸地(すぐに嶋郡へ)

『日本書紀』推古天皇10年(602)2月1日条

来目皇子為擊新羅將軍、授諸神部及国造・伴造等、并軍衆二万五千人。

『日本書紀』推古天皇10年(602)4月1日条

將軍来目皇子到于筑紫。乃進屯嶋郡、而聚船舶運軍糧。

齊明天皇下向時に最初に入った「磐瀬行宮」

『日本書紀』齊明天皇7年(661)3月25日条

御船還至于娜大津。居于磐瀬行宮。天皇改此名曰長津。

朝倉橘広庭宮とは異なり、建設記事がない→既存の施設？

これを「長津宮」と改称。ナガツ＝「ナ」が「ツ」、すなわち、「ナ」の「ツ」ただし、齊明天皇の遺骸は「磐瀬宮」に移されており、改称は天智朝か。

ここで、大海人皇子が白村江戦の指揮、敗戦処理に当たったはず。

天智天皇6年(667)11月9日条の「筑紫都督府」もここか。

『日本書紀』天武天皇2年(673)11月21日条

饗高麗邯子・新羅薩儒等於筑紫大郡。賜祿各有差。

(長津宮ないしその後身施設を指すか。筑紫大宰の拠点？)

『日本書紀』持統天皇2年(688)2月10日条

饗霜林等於筑紫館。賜物各有差。(筑紫館は後の鴻臚館)

『日本書紀』持統天皇2年(688)9月23日条

饗耽羅佐平加羅等於筑紫館、賜物各有差。

『日本書紀』持統天皇3年(689)6月24日条

於筑紫小郡設新羅弔使金道那等。賜物各有差。

cf 『日本書紀』持統3年(689)9月10日条

遣直広参石上朝臣磨・直広肆石川朝臣虫名等於筑紫、

給送位記、且監新城。(大宰府政庁と条坊を指す)

こう繋ぐことができれば、那津官家は磐瀬にあることになる。